



Title	カンボジア人日本語学習者における授受補助動詞の習得に関する研究—日本語学習者に見られる「非用」に着目して—
Author(s)	Un, Tevanda
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105494
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (ウ ン テ ワ ン ダ)

論文題名

カンボジア人日本語学習者における授受補助動詞の習得に関する研究

－日本語学習者に見られる「非用」に着目して－

論文内容の要旨

本論文では、カンボジア人日本語学習者を対象として、授受補助動詞の「非用」（すなわち、授受補助動詞を使用すべき場面で使用しないと誤用になる現象）に関する習得上の問題点を明らかにすることを目的とする。本論文は、7章からなる。序論となる第1章では研究目的を述べ、最終章となる第7章では本論文における考察や提案をまとめるとともに、今後の課題についても言及した。

先行研究において、最も目立つ誤用は授受補助動詞の語彙形式の選択における混同ではなく、「非用」だと指摘されることがある（cf. 中崎2002, 李2021など）。本論文では、以下の3つの研究課題を設定した。

研究課題1) 受容面において、カンボジア人日本語学習者の授受補助動詞の「非用」に対する理解は学習レベルと学習時間によって有意な差が見られるか。

研究課題2) 負の転移によって「非用」となる傾向があるか。

研究課題3) 学習者にとって恩恵や感謝の感じられない文脈では、「非用」となる傾向があるか。

上記の研究課題を設定した背景として、学習者の誤用や「非用」の要因には、文法知識の習得状況だけでなく、学習経験や学習時間といった量的差異が影響する可能性が指摘されている（cf. 周2019）ことが挙げられる。しかし、一般的に学習歴や学習レベルが高いほど理解度も高いと想定されるものの、授受表現のように語用的・概念的側面を含む項目では、その前提が必ずしも成立するとは限らない。特に、学習者の母語に授受補助動詞に相当する文法構造が用いられない場合、日本語で恩恵性を文法的に明示しない言い方を選択してしまう可能性がある。このような現象は、母語の言語構造を日本語に適用してしまう負の転移として説明できる。したがって、学習者の選択判断において、単なる文法等の知識不足ではなく、母語からの言語的転移が影響しているのかどうかを明らかにすることは、指導上重要な意義を持つ。さらに、日本語学習者は、授受補助動詞を「恩恵を表す決まった文法形式」として学習することが多く、恩恵性が弱い文脈においても機械的に使用したり、逆に恩恵性が理解できないため、無使用を選択したりする誤判断をする可能性がある。特に、恩恵性という語用論的概念が母語において文法的に明示されない場合、使用判断が概念理解に依存するため、文脈解釈と形式選択との間に乖離が生じやすい。

以上を踏まえ、本論文では、学習者が文脈における恩恵性判断にもとづき授受補助動詞の無使用を選択する傾向があるかを明らかにすることで、授受表現の習得過程における言語的・語用論的理解の役割を検討し、授受補助動詞の指導における能力育成の必要性を示したいと考える。本論文の目的のひとつは、カンボジア語を母語とする中級以上（初級レベルを終えた学習者）の日本語学習者を対象にした受容調査を通して、授受補助動詞における「非用」と授受補助動詞の理解を調査した上で、「非用」の習得における問題点を解明し、カンボジア人日本語学習者の「非用」の背景にある恩恵意識を明らかにすることである。なかでも、学習者がどのような文脈で恩恵や感謝を感じにくいのか、そして、学習者による授受補助動詞の使用と無使用との間にどのような関連性があるのかを探りながら、「非用」の要因を明らかにすることが重要である。本論文のもう一つの目的は、調査結果を通して、授受表現を指導する際の注意点を明らかにし、カンボジア日本語教育への提言を示すことである。本論文をカンボジア人学習者に対する授受表現の指導法を改善するための第一歩と位置付け、そのための基礎研究とすることを目指す。

まず、本論文の第2章では、「非用」に関する先行研究を概観した。次に、本調査の前段階として、日本語とカンボジア語の両言語における授受表現の構造的・語用論的差異を明確にする必要があると考えた。第3章では、両言語の授受表現を対照するために、日本語の授受表現研究で重視される三つの観点、すなわち、「好ましさ」、「利益性・恩恵性」、「方向性・視点制約」を中心に先行研究を概観した。その上で、これらの特性がカンボジア語の授受表現においてどのように表現されるかを詳細に分析した。その結果、いくつかの顕著な相違点が明らかになった。ま

ず、「好ましさ」に関しては、日本語の授受動詞がしばしば受け手にとって望ましい行為や物の授受を前提とするのに対し、カンボジア語では授受表現が中立的・客観的に用いられる傾向が見られた。すなわち、授受の対象が受け手にとって好ましいものである必要がない。これに関連して、「利益性・恩恵性」においても、カンボジア語の授受表現はそのような含意を持たず、中立的に描写する傾向が確認された。さらに、「方向性・視点制約」に関しては、カンボジア語の代表的な授受構文である ?aoj 構文および tòstuol 構文では、基本的に話者の視点が文法的に関与しないことが明らかとなった。しかしながら、 ?aoj 構文の用例分析を進める中で、特定の前置詞を付加することで話者の視点を表すことが可能であることが判明した。この前置詞は、移動動詞 mòok 〈来る〉および tàn 〈行く〉が文法化して派生したものであり、授受構文や与格構文において ?aoj と共起させることにより、授受の方向性の違いを示す役割を担っている。具体的には、 mòok が ?aoj と共起する場合は、物や行為が話者に近づくこと（求心的方向性）を示し、日本語の「くれる」に対応する視点を表す。一方、 tàn が ?aoj と共起する場合は、物が話者から離れること（遠心的方向性）を示し、「あげる」に対応する視点を示す。このように、カンボジア語の授受表現にも方向性の区別が存在するが、 ?aoj による方向性の表示が明示的ではなく、日本語よりも文脈依存的であることが確認された。

先行研究における知見および両言語の対照分析を踏まえ、本論文では、研究課題に対し、以下の3つの仮説を立てた上で、授受補助動詞の「非用」に関する理解調査を実施した。

仮説1) 受容面において、学習者の授受補助動詞の「非用」に対する理解は学習レベルと学習時間によって有意な差が見られる。

仮説2) ?aoj が使用されない場合、「てくれる」「てあげる」ではなく、授受補助動詞の無使用を選択する傾向がある。

仮説3) 学習者にとって、恩恵や感謝の感じられない文脈では、授受補助動詞の無使用を選択する傾向がある。

第4章では、調査方法について説明した。授受補助動詞を用いない表現が「非用」になるかどうかを判断するために、まず日本語母語話者の協力を得て、カンボジア人日本語学習者に対する理解調査の候補となる問題文について適切さを判断してもらった。そして、その調査の結果をもとに、「非用」の判断基準を決定し、母語話者用の調査問題の中から「非用」に関係する問題を選び出し、学習者用の本調査を行った。

そして、その調査結果にもとづき、第5章において、上記の3つの仮説が成立するかどうかの考察を行った。本調査の結果、カンボジア人日本語学習者の「非用」に対する理解は全体として5割未満にとどまり、授受補助動詞の使用・無使用に関する知識や理解が十分ではないことが明らかとなった。まず、「非用」となり得る19問の問題文の調査結果を対象に t 検定を行い、「非用」における学年間の平均正答値の差に有意差があるかを分析した結果、仮説1は支持されなかった。学年による有意な差はなかった一方で、特に、日本滞在期間が長い学習者ほど、「非用」に対する理解が高まる傾向が見られた。続いて、フォローアップインタビューの分析を通して、仮説2の妥当性を検証した。学習者は、調査で問われた問題文をカンボジア語に訳した際に ?aoj が使用されない場合、「てくれる」や「てあげる」よりも授受補助動詞の無使用を選択する傾向が確認された。学習者はカンボジア語において ?aoj の使用が不要または不自然とされる文構造を日本語における授受補助動詞の無使用に対応するものとして捉えていることが示された。これは典型的な負の転移（母語による悪影響）の表れであり、仮説2が支持されたといえる。さらに、仮説3が成立するかどうかを確かめるために、「恩恵を感じにくい文脈」に焦点を当てた考察を行った。 t 検定の結果から、学習者は2年生から3年生にかけて「非用」に関する理解が低下し、4年生に進んでも顕著な改善が見られなかったことが分かった。1年生と2年生の初級教材では授受補助動詞を「恩恵」や「感謝」と結びつけて教授する傾向が強く、非恩恵的な用法や中立的文脈における使用がほとんど扱われていないことも確認された。その結果、母語の負の転移とあいまって、中上級学習者ほど恩恵性を過度に重視し、使用すべき場面で授受補助動詞を避けるという逆説的な傾向が見られた。これは、学習の進行に伴い、日本語母語話者に比べて恩恵性を過大に捉える傾向が強まることを示唆している。また、フォローアップインタビューからも、学習者は恩恵や感謝が感じられない文脈では授受補助動詞を使用しない傾向が確認され、仮説3が支持された。フォローアップインタビューの分析からは、学習者が授受補助動詞を使用しない理由として、「恩恵を感じないから」など、文法よりも感情的・文化的要素に基づく判断が多く挙げられた。一方で、多くの被験者が自らの判断根拠を十分に説明できず、授受補助動詞の使用・無使用に関する判断力が習熟されていないことも明らかになった。これらの結果から、「非用」は単一の要因によって生じるものではなく、恩恵性の理解不足、母語による転移、限定的な文法知識など、複数の要因が絡み合っていることが示唆された。

第6章では日本語学習者向けの複数の文法教材における授受表現の扱いを比較した。その結果、今回調査を行った

教材では、「非用」に関する説明がなされていないことが観察された。第5章の調査と第6章の教材分析を通して、カンボジア人日本語学習者が授受補助動詞を適切に使用できるようにするためには、①恩恵性の概念を明確に説明し、文化的相違を踏まえた対人的配慮の指導を行うことと②授受補助動詞が持つ恩恵性以外の機能の指導を明示的に行うことの二点を重視する必要があるとの提案を行った。

本論文は、授受補助動詞の「非用」現象を、言語間の対照と文化的理解の観点から捉えることにより、今後のカンボジアの日本語教育における授受表現指導の改善に資する知見を提供できるものである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (ウン・テワンダ)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査 教 授	岸田 泰浩
	副 査 教 授	筒井 佐代
	副 査 教 授	今井 忍
	副 査 教 授	小森 万里
	副 査 教 授 (東京外国語大学)	上田 広美

論文審査の結果の要旨

本審査対象論文は、カンボジア人日本語学習者において日本語授受補助動詞の「非用」、すなわち、授受補助動詞を使用していないために日本語として誤用になる現象がどの程度観察され、それが何に起因するかを明らかにしようと試みるものである。カンボジア人日本語学習者を対象としたアンケート調査を実施し、そこで得られたデータに統計学的手法による実証的な分析を施した上で、対照言語学および学習者意識の観点から「非用」の要因を詳らかにし、カンボジア語母語話者に対する日本語教育への貢献を目指す意欲的な論考である。

対象論文は、7つの章から構成されている。

第1章では、先行研究において日本語学習者による授受補助動詞の誤用としてもっとも注目されるのが語彙形式の選択に起因するものではなく、授受補助動詞の不使用によるものであると指摘されているのを受け、日本語が中級レベル以上のカンボジア人日本語学習者を対象にした受容調査を実施し、「非用」の理解の程度とその問題点を解明するとともに、日本語教育の現場で授受表現を指導する際の注意点を示しながら、カンボジアの日本語教育への提言を行うことが目的であることが示された。それらの目標を達成するために掲げられたのが次の研究課題である：（課題1）受容面において「非用」に対する理解は学習レベルと学習時間によって有意な差が見られるか、（課題2）母語からの負の転移によって「非用」となる傾向があるか、（課題3）学習者にとって恩恵や感謝が感じられない文脈では「非用」となる傾向があるか。

第2章では、先行研究が「非用」の原因に言及しているか否か、何を原因と考えているか等を簡明にまとめた上で、それらの研究に潜む共通の問題点として、授受補助動詞の不使用が不自然・不適切であると判断する基準が明確でないことが指摘されている。

第3章では、課題解決のための基礎となる日本語とカンボジア語の授受表現の文法的対照が行われた。その結果、日本語の授受表現が持つ「好ましき、利益性・恩恵性、方向性・視点制約」という特性についてカンボジア語の授受表現である *ʔaoj* 「あげる、くれる」や *təotuoɭ* 「もらう」が中立的であることを示しただけではなく、*ʔaoj* 構文に移動動詞を起源とする前置詞を用いることで「～してあげる」と「～してくれる」のような方向性をカンボジア語でも言い分けることができることも明らかにした点は言語研究としても優れた成果だと言える。そして、先行研究や本章の考察を踏まえ、研究課題に対して3つの仮説を立て、それを検証する形で以降の議論が展開されている：（仮説1）受容面において、学習者の授受補助動詞の「非用」に対する理解は学習レベルと学習時間によって有意な差が見られる、（仮説2）対応するカンボジア語で *ʔaoj* が使用されない場合、日本語で授受補助動詞の無使用を選択する傾向がある、（仮説3）学習者にとって恩恵や感謝の感じられない文脈では、授受補助動詞の無使用を選択する傾向がある。

第4章では、日本語母語話者に対する授受補助動詞のアンケート調査の結果をもとに、具体的な根拠を示しながら「非用」の判定基準を明確に設定した。これは学習者用の本調査に客観性を持たせるための重要な提案となっている。

第5章において、統計処理やフォローアップインタビュー等による考察を通じて、仮説1以外の仮説が成立し、さらに、「非用」が単一の要因によって引き起こされるのではなく、恩恵性の理解不足、母語による負の転移、限定的な文法知識など、複数の要因が絡み合っていると結論付けられた。多数の被験者を対象にして大量のデータを収集し、フォローアップインタビューにおいて多角的な側面から学習者の意見を分析したことによる功績であると言える。

第6章では、多くの教科書で「非用」に関する説明が欠けていることが教材分析によって明確になり、カンボジア人日本語学習者に対する日本語教育においては、恩恵性の概念、文化的相違を踏まえた対人的配慮、授受補助動詞の

多様な機能に関する指導を重点的に行う必要があると提案がなされた。本章の論述からは対象論文が実践的な有用性も有していることをうかがい知ることができる。

第7章では、これまでの考察を総括するとともに、学習者を指導する際の留意点などが述べられている。

審査対象論文は、多数の日本語母語話者およびカンボジア人学習者にアンケート調査を実施し、「非用」を扱った研究の中でも量的に抜きん出ているだけではなく、従来、疎かになっていた「非用」の判定基準を明確にした点で質的にも優れている。フォローアップインタビューも広範囲に渡って丹念に行われており、学習者の言語や「恩恵」に関する認識がよくくみ取られている点も評価できる。さらに、対象論文は、「非用」に関する積極的な教育が必要であることを提言した日本語教育学の論考としてのみならず、授受動詞に関する日本語とカンボジア語の対照研究やカンボジア語学の研究としても価値を認めることができる。

その一方で、細部においては改善すべき点が残されている。アンケートでは多種多様な文型を用いた問題文が準備されているが、補助動詞選択における文型の影響の有無に関する考察が見当たらない。フォローアップインタビューでは、採取された学習者の意見に基づいて丁寧に考察がなされている中で申請者の憶測による見解が一部見られ、また、アンケートの問題文に対するカンボジア語訳が誰によるものかが明記されていないなど、やや雑な記述が見受けられる。カンボジア語の言語学的分析においても、先行研究の調査により一層の精緻化が望まれる。

上記の通り、論証にやや弱い面があるとは言え、「非用」の明確な基準を提示し、多くのデータやフォローアップインタビューの内容を分かりやすく論述し、統計的、言語学的、文化的に多角的な見地から分析を施し、それらに基づいて、授受補助動詞に関するカンボジア語母語話者への日本語教育が進むべき方向を明示した対象論文の価値が大幅に損なわれているとは言えない。また、日本語研究としても、（対照言語学を含む）カンボジア語研究としても、本論文の学問的貢献度は高い。

以上のことから、本審査委員会は、全員一致で審査対象論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与する水準に達していると判断し、合格との結論に至った。